

常識的實在論の基礎づけ

久松 眞 一

觀念論が主張する如く、何人かの意識にあらはるゝことなくしては、自然界に於てにせよ、精神界に於てにせよ、凡そ存在といふことに關しては、何事も語る事ができぬと、いふことは、誰人も承認しなければならぬ眞理であるかのやうに思はれる。それにもかゝはらず、常識は意識するといふこと、存在するといふことゝは全く別のことで、いもあるかのやうに常に確信して居る。しかうして、この確信は、常識をして、私がか、常識的實在論と名けようとする一種の實在論を構成せしむるに至つたのである。しかしながら、この實在論は、さきへのべた如き主張を持つ觀念論の立場からは、全然拒まるべきものであるかどうか。一見したところでは、この二つは恰も相容れないかの如く思はれるのであるが、私は觀念論の主張を承認しつゝ、しかも常識的實在論を正しい考へ方として基礎づけることができはせまいかと思ふ。それで、そのことを明かにしてみたいといふのが、私のこの小品の目的である。

私はまづ、常識は、意識するといふことゝ、存在するといふことゝが全く別なことであるといふ信仰にいかにして到達するかを考察し、それによつて常識的實在成論立の過程を示してみようと思ふ。

私は今便宜上私の前にある一つの机に依つて、私の考察を進めてみよう。私が今その机を純粹に、視て居るとする。この場合に純粹に視るといふ意味は、その机以外の何物をも視ないといふことゝ、視覺以外の作用を全く混入しないといふことゝである。それであるから、そこには視られたる机以外の何物もなく、又視られたる机によつて推論されたやうな何物もないであらう。随てそこにあるものは視られたる机のみであつて、私の眼とか、常識のことばによつていひあらはされたる机といふやうなものはないのである。私の眼が今私の視たものゝうちにあるならば、私は机のみを視て居るのではなくして、机とゝもに眼をも視て居ることになつてしまふであらう。又、常識のことばによつていひあらはされたる机といふやうなものが、私の視たものゝうちにあるならば、それは視覺以外の作用の混入の結果であるから純粹に視ることにあらぬであらう。それで、私が純粹に視て居る机は、私が視る前から存

在して居るやうな机でもなく、堅さや、音の屬性を持つた机でもなくして、私が見る時にのみ存在し、色と形とのみを持つた机である。而して、その色も形も私が見る時にのみ特有なもので、常識に於ていはるゝ如きこの机の色、この机の形といふやうなものではない。私が純粹に机を視て居る場合には、決してかくの如き色や形を視出すことはできないが。くの如き色や、形は私が純粹に机を視ることによつて構成されるものではなくして、机に關する純粹視覺の様々な場合の綜合によつて構成されたものである。さればそれは色や形ではなくして、色や形の思想に過ぎない。色や形は吾々の思惟の構成物ではなくして、純粹視覺の直觀である。赤の思想は赤くはないが、赤の純粹視覺は赤い、矩形の純粹視覺は矩形であるが、矩形の思想は矩形ではない。若しもさうであるならば、常識で形は正方形で、色は黒漆の机と稱するやうなもの、純粹視覺の世界には存在しないことは明白である。純粹視覺には推論とか、記憶とか、聯想とかによつて得られたるものが少しでも含まれてはならぬ。それであるから、私が今、純粹に視て居る机に於ては、視覺と机とは決して別なものではない。視られて居る机と視て居る眼との間には些少の隔りもない、といふよりはむしろ、その何れもなくして、只、そこにある特殊の色と形とを持つた机があるのみである、とい

ふ方が適切である。こゝに於ては視るといふことゝ在るといふことゝは同じことである。但し、この場合に在るといふことは思惟の構成した存在ではなくして、純粹視覚の構成した存在である。色及び形の最も要素的存在である。吾々は思惟作用を少しもかることなくして、こゝに最も要素的な存在の意識に達することができ。尤も若しも吾々が時間の形式をかることなくしては、空間の認識が得られないとするならば、形を認識するには時間を要し、随つてそこに思惟作用を要するかも知らないが、空間の認識には必ずしも時間を要しない。吾々の視覚は時間を要することなくして空間を認識することができる。もとより吾々の視野に餘る大いなる空間の認識は時間の形式をからなければ不可能であるかも知れぬ。しかうして前の視野と、後の視野とを結びつけるために統覺といふやうな純粹視覚以外の作用を要するかも知れぬ。しかしながら、いかにそのやうな理由のために他の作用を要するにしても、それは單に結びつける作用をなすに過ぎぬのであつて決して空間の認識を與へてゐるものではない。

かくて、私は純粹に机を視ることによつて、具體的な色及び形を持つた机の存在を意識するであらう。然しながら、この存在に於ては視るものと、視らるゝものとは二つ

ではないから、知るといふことゝ存在するといふことゝを別の事と考へる常識的實在論は成立しない。然らばそれはいかにして成立するであらうか。それを明かにするために、私は純粹視覺と純粹觸覺とを關係せしめてみようと思ふ。私たちは視覺と觸覺とを同時にはたらかすことができる。それであるから、私は今、机を視ると同時に、その視て居る机に私の手を以て觸れることができる。その時には、私の視覺は、私の手が觸れて居るものは、私が視て居るものと同じものであることを意識すると同時に、私の觸覺は、私の視て居るものが、かくかくの觸覺を與てるものであるといふことを意識するであらう。そこで、私には、視覺して居る机と、觸覺して居る机とが同じものであるといふ意識が起る。この同一の意識を持ちながら私が、私の眼を閉ぢるとする。其時、私の視覺的存在としての机は全然消失するが、觸覺的存在としての机は依然として存續するであらう。この存續は、私が視て居なくても、視て居ると同じ、机が存在するといふ考に私を導く。しかうして、この考は必ずしも不合理な考ではない。もとより、今現に存續して居る机は觸覺的の机であつて、視覺的の机でないから、私が視て居つたときの机とは同じ、机であるといへないやうである。なるほどそれはさういふ意味では同じ机ではない。視覺的の机と、觸覺的の机とは嚴密

に差別せられねばならぬ。しかしながら、さればとて、私に現に觸覺に於て存續して居る机は、私が視て居つた机と全然別なものとも考へられぬであらう。もしも全然別なものとするならば、さきに、私が視て居る机に、私の手が觸れたときに、私の視覺は、私の手が觸れた机が私の視て居る机と同じ机であるといふ意識に到達しなかつたであらう。かくいふことによつて私は決して、視覺や觸覺が、私の手が觸れた机と私が視て居る机とが同一であるといふ意識を直接に與へると、いはうとするのではない。その同一の意識を與てるものがたとひ何であるにしても、私が視て居る机とは異つたものに私の手が觸れても、その視て居る机と、手の觸れた机とが同一であるといふ意識は私には起らないであらう。それであるから、私が眼を閉ぢてもなほ觸覺に於て存續して居るその机は、私が眼を開いて居るときに視て居つた机とは決して別な机ではないといふことは不合理なことではないであらう。然らば、私が視る、視ぬにかゝはらず、私が視て居るときと同じ机が存在するといふことも當然いひ得る筈である。もし又、私が眼を閉ぢるといふことが、その机が存在しなくなるといふことと同義であるならば、私の手はその机の觸覺を存續すべき筈でない。かくて私は机は視らるゝことなくしては、存在し得ないといふことを認容しつゝ、しかも視らる

ることなくしても机は存在するといふことを承認することができにいたつた。普通視ないでも存在すると常識でいふやうな存在、即ち知るといふ事とは別なことを考へられたる存在は後者に屬し、直接經驗以外に存在はないと徹底經驗論者がいふ如き存在は前者に屬するであらう。この存在の兩義は恰も矛盾するが如くであるけれども、前述の如く攻究してくと決して矛盾するものとは思はれぬ。それどころか、何れかを無視するときは、現象界の説明に於て難點に遭遇するであらう。後者を無視したバックレーは神の心の内にその逃げ場を求めねばならなかつた。然しながら、神の心の内の存在とは後者の存在に外ならぬのである。又、前者を無視したカントは、物自体に於て迷路にさまよはなければならなかつた。それであるから、經驗せずとも存在するといふ意味は、經驗されないものは存在しないといふ意味を無視したものであつてはならぬ。又、逆に、經驗されないものは存在しないといふ意味は、經驗せずとも存在するといふ意味を無視したものであつてはならぬ。私は、知らないでも存在すると常識が信じて居るのは、知られないものは存在しないといふことを無視したものではないと思ふから、かゝる常識的實在論は正しい考として許されなければならぬと思ふ。

私は、上に述べてきたところによつて、常識的實在論成立の過程を、不充分ながらも明かにし、しかうしてその成立が不合理ではないといふことを主張したつもりである。私は、上に於ては便宜上机により、しかも私の視覺と覺觸のみを用ゐてその成立の過程を述つたが、むろんそれに限られる筈のものではない。それであるから私はその成立の過程を聽覺、味覺、或は嗅覺等の關係に於ても見ることが出来る。そして又、私は、私が知らないときに、私か知つて居るときと同じものが在ることを他の人から聞くことによつて、知るといふと、存在するといふとは別なことであるといふ信仰を得るにいたることもあるであらう。何れにしても、この信仰は、たとひ私は知らないでも事物は存在して居るといふことを保證するもの——それは他の人であるにしても、或は、他の感覺であるにしても——がなかつたならば私に起りやうがないであらう。しかしながら、この保證といふことはいかにして可能であるか。さきの机の例を取つていふならば、私が今現に視て居らないでも、視て居つた机と同じ机が存在するといふことは、私がその机を視て居つたときに、その視て居る机に觸れた手の觸覺が、私が眼を閉ぢても依然として存續して居るといふことから、信じられるに至

つたのであるが、この場合に純粹視覺としての机と、純粹觸覺としての机とは同じものではないにかゝはらず、それを同じ一つの机であるとするといふことはいかにして可能であるか、といふことである。この問題は、純粹經驗、或は直接經驗に於ては經驗は多元論的であるにかゝはらず、何故に吾々は同じ机とか同じ時計とかいふやうな意識を持つに至るであらうか、同じ時計とか同じ机とかいふやうなものは實際は存在しないものであつて、只單にそれは主觀の意識の綜合的統一の産物に過ぎぬものではないか、といふやうな認識論上重要な問題に密接な關係を持つものである。私は今、進んでこの問題を論究してみようと思ふ。(未完)